

埋文にいがた

No. 61
2007. 12. 26

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

19年度発掘調査遺跡の紹介

やまきし 山岸遺跡

たぶせ
(糸魚川市田伏字山キシ863ほか)

山岸遺跡は、日本海から約400m内陸の丘陵に挟まれた標高10～15mの谷の中に立地しています。発掘調査は、北陸新幹線および国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い平成18年度から開始し、平成19年度は14,700㎡を調査しています。遺跡は縄文時代から安土・桃山時代にかけて断続して営まれており、主体は鎌倉時代から室町時代(13～14世紀)です。

鎌倉時代から室町時代初めの遺構は、調査区南側から西側にかけての丘陵の谷部で掘立柱建物、井戸、土坑、溝、石列、庭園などが見つかりました。そのうち西側の谷部では盛土して平坦に整地し、その上に梁行4間(8.7m)×桁行7間(14.2m)や梁行5間(11.3m)×桁行7間(14.0m)の大

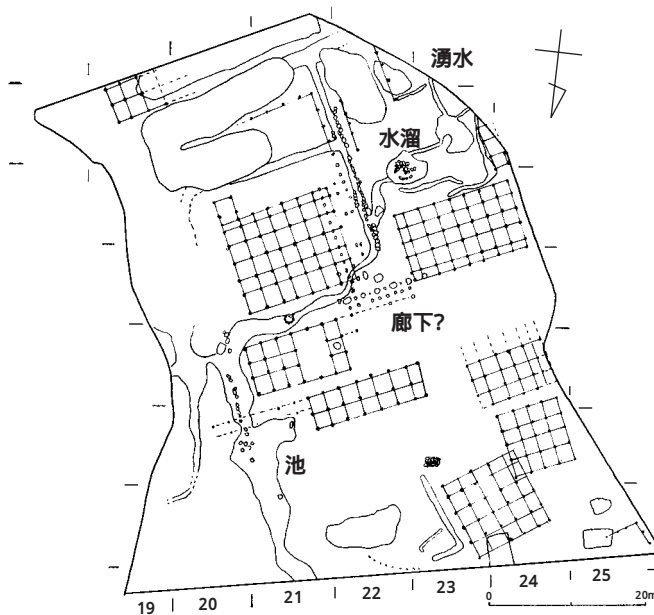


図1 山岸遺跡2区遺構模式図(写真1の左奥)



写真1 調査区全景(手前は新幹線保守基地、右奥は国道8号バイパス用地)

型総柱建物や庭園、石列、溝などを築いていました。庭園は、南側の丘陵裾の湧水地から扁平な礫を敷き詰めた土坑と溝で結び、そこから大型建物の間を通り東寄りに抜け、石を敷き詰めた池と思われる遺構に通じています（図1、写真2）。地方の鎌倉時代の遺跡で庭園が検出されることは稀であり、とても貴重な発見でした。

海岸側の調査区北東側では平安時代から室町時代の水田、溝などの遺構が見つかりました。水田は砂礫に埋もれた田面が3枚確認でき、上の第1、2面が鎌倉時代から室町時代で、その下の第3面が平安時代に営まれたものと思われます。水田は傾斜にそって棚田状に作られています（写真3）。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、土器・陶磁器（土師器・珠洲・青磁・白磁・青白磁、瀬戸・美濃など）、木器（漆器椀・漆器皿・箸・下駄・板草履・板材・網代・柱根など）、金属器（銭貨・刀子・釘・蓋・銅製部材など）、石器（石鍋、硯、砥石など）が出土しました。その中で、銅製部材には開いた傘を2本違えた傘紋が施してあり、この傘紋が鎌倉北条氏一族の名越氏を示す家紋である可能性があります（写真4）。文献史料によれば、13世紀末頃に越後国沼河郷（旧能生町、糸魚川市、青海町付近）の地頭として「備前々司殿」と記述があり、この「備前々司殿」は能登、安芸の守護など兼任していた名越宗長と推定されています。

今年の調査成果から、山岸遺跡は庭園を伴う大型の掘立柱建物や、傘紋を施した銅製品の出土、文献史料などから沼河郷地頭の名越氏に深く関係のある中心的な屋敷と考えられます。

（飯坂盛泰）



写真2 流れ(溝)と園池(右側)



写真3 水田跡

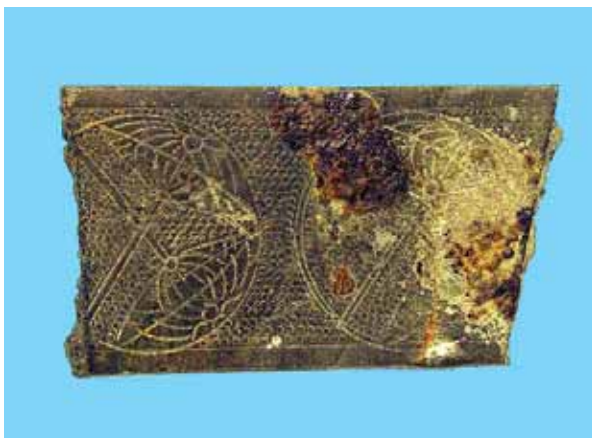


写真4 「傘紋」入り銅製品



写真5 網代

やち 谷地遺跡

(村上市大字天神岡字谷地ほか)

谷地遺跡は三面川支流の山田川左岸に広がる低湿地部にある遺跡です。遺跡の周辺には水田が広がり、南側500mほどのところに中世の居館大館跡、さらに南に縄文後期の長割遺跡、縄文中期の東興屋遺跡などがあります。

日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、今年6月から発掘調査を開始し12月初旬に終了しました。面積は中世が3,107㎡、縄文時代が2,170㎡です。遺跡は地表面下30～50cmで検出した中世(15～16世紀)の遺構と、約1.6mほどで検出した縄文時代前期(約6,000年前)の遺構からなる複合遺跡です。中世遺構の検出面は標高約12.5m、縄文時代前期の遺構検出面は標高約11mを測ります。

縄文時代の遺構は三面川やその支流の小河川により形成された氾濫堆積土壌中に掘り込まれています。遺跡の南側は土壌化が進んだやや粘質の茶褐色土が遺物包含層となっていますが、北側は河川の影響により土壌内の有機質が溶脱したシルト質の土壌です。南側は遺物包含層の厚さが20cmほどなのに比べ北側では50cmほどあり、これを土質の違いから大きく2つに分層しました。発見された遺構数は現在のところ、屋外炉64基、土坑118基、ピット1,219基、性格不明遺構24基、遺物集中5か所です。遺構の分布は遺跡の中央から南側に1,150基ほどの小ピット群が集中し、北側には河川流路沿いに土坑や屋外炉が集中しています(写真1)。炉の周囲や土坑内部から土器、磨石、磨製石斧、筥状石器、石鏃、管玉が出土しています。出土した土器は縄文時代前期の羽状縄文系土器(花積下層式から布目式や新谷遺跡相当)で、羽状縄文のほか捺系圧痕文、爪形文、網目状捺系文、斜縄文、ループ状文などの文様がみられます。これらの出土遺物から谷地遺跡は、県内でも調査事例の少ない縄文時代前期の遺跡であることが判明しました。土器は遺跡南側に位置する5か所の遺物集中から出土したものの以外はほとんどが北側の土坑(SK)内から出土しています。土坑内の土器はほぼ完形のものが口を下にした状態で出土したり(写真2)、割れた状態で土坑の中央に重なるよう出土(写真3)したりしています。また、石器だけしか出土しない土坑(写真4)もあります。このような違いがどのような意味を持つのか、今後報告書を作成する中で分析を進める予定です。(株)シン技術コンサル 大島秀俊)



写真1 北西隅部遺構群



写真2 SK400遺物出土状況



写真3 SK1414遺物出土状況



写真4 SK877遺物出土状況

ろくたんだみなみ
六反田南遺跡
 (糸魚川市大和川字六反田地内)

六反田南遺跡は、日本海に近い海川^{うみかわ}下流右岸に立地しています。北陸新幹線、および一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成18年度から発掘調査を行っています。今年度の調査は4月～11月まで行い、主に縄文時代と古墳時代の遺構を検出しました。遺物は縄文時代中期、弥生時代中・後期、古墳時代前・中・後期、奈良～平安時代、室町時代～江戸時代のものが見つかりました。

縄文時代の調査は約200㎡の範囲で実施しており、^{たてあなしゅうきょ}竪穴住居や^{どこう}土坑を検出した高い部分(標高4.5m)と、遺物が集中して出土した低い部分(標高3.5m)に分けられます。竪穴住居は3軒検出しました。1号住居(写真1)は平面形が長辺4.3m、短辺3.7mの隅丸長方形でほぼ中央には楕円礫4個で組まれた^{いしがこいる}石囲炉があり、底に扁平の^{へんぺい えんれき}円礫を、^{ふくしきろ}東側には掘込みを伴い複式炉の形態をとります。柱穴は5基検出しました。2号住居(写真2)は平面形が長辺4.8m、短辺3.3mの隅丸長方形で、住居の中央北寄りには^{どきじきろ}土器敷炉があります。床面上から^{だい}台付土器が出土しています。3号住居は平面形が南北幅3.4mの隅丸方形で南東隅から鮮やかな緑色をしたヒスイが出土しています。遺物は縄文時代中期中葉の深鉢や浅鉢が主で、富山県や石川県で一般的な上山田・天神山式土器様式に類似します。また東北地方北部の円筒土器様式に類似したのも出土しています(写真3)。石器は^{せきぞく}石鏃・^{だせいせき}打製石斧・^{ませいせき}磨製石斧・^{かいがらじょうはくへん}貝殻状剥片、良質なヒスイが出土しました。沖積地における縄文時代中期の遺跡の発見例は県内では珍しく、また標高4.5～3.5mの沖積地でこの時期の竪穴住居の発見は県内初であり、貴重な調査事例となりました。

古墳時代後期の土器が多く出土した川跡からは、^{こもちまがたま}子持勾玉・^{まがたま}勾玉・^{くだたま}管玉・^{うすだま}白玉・^{ぼうすいしゃ}紡錘車・^{かっせきせいも}滑石製模造品とその製作工程品が大量に出土しました(写真4)。^{としし}砥石などの加工具も出土しており、遺跡周辺で盛んに製作されていたことが窺えます。

(株)吉田建設 細井佳浩・松井 智・水落雅明)



写真1 1号住居(縄文時代)



写真2 2号住居(縄文時代)



写真3 土器とヒスイ(縄文時代中期)



写真4 玉・石製模造品・紡錘車と砥石(古墳時代)

大館跡

(村上市大字天神岡字大館ほか)

大館跡は中世の館で、東西約110m、南北約100mの方形を呈し、一部に土塁が残存しています。発掘調査は日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、館東側外縁部を中心に平成18・19年度に実施しました。

平成19年度発掘調査で検出した遺構は、堀1条、土塁1基、井戸2基、溝・河川流路4条、土坑1基、不明遺構1基およびピットなどです。出土した遺物は、白磁・青磁・染付などの輸入陶磁器、珠洲焼、越前焼、瀬戸美濃焼、瓦器、土師質土器、金属製品および漆器や刀形・舟形・木簡などの多量の木製品などとなっています。

調査した遺構で中心となるものは、館の周囲を巡ると考えられる堀です。この堀は、調査区を縦断するように、南東コーナー部分から北方向に約150m検出しました。断面形は逆台形で、規模は最大で幅約10m、深さ約1.6m、平均で幅約8m、深さ約1.4mとなります。堀に伴う施設には、葺き石状遺構があります。これは、堀の館側階段状の壁面に花崗岩を主体とする拳大程度の白い礫を貼り付けたものです。約5mの範囲で残っていました。堀の土層は、大きく4層に分けられ、そのうち最下層は堀使用時に堆積したものと思われます。

遺物は、中世・近世のものが出土しています。上層～下層はそれらが混在していますが、最下層は中世の遺物のみとなっています。主な遺物は、漆器や京都産土師質土器などです。漆器は30点弱出土しており、赤色の漆を使用したものが多く見られます。そのうち4点は、高級品である内外面赤彩の皆朱漆器です。土師質土器は、ロクロ成形と手づくね成形の2種類があります。このうち手づくね成形のものは、胎土・技法から京都で製作されたものと考えられ、3～4個体確認できます。灰白色を呈し、直径は約22cm前後です。

大館跡は、出土遺物から15世紀中頃～後半が中心時期であったと推測できます。館主は、大館跡が村上市周辺地域で最大級の方角居館であり、また皆朱漆器や京都産土師質土器などの希少品を持つことから、本庄氏などの有力な国人領主層であったと考えられます。

(加藤建設(株) 青木 学)



写真1 大館跡全景(左側が発掘調査地区)



写真2 堀全景



写真3 葺き石状遺構



写真4 皆朱漆器碗出土状況

萩原遺跡

(阿賀町大字谷花字萩原甲555ほか)

萩原遺跡は、阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高53mを測ります。一般国道49号揚川改良事業の建設に伴い、平成19年7月中旬から10月中旬にかけて970㎡の範囲を調査しました。調査により、縄文時代中期後葉および縄文時代後期前葉～中葉の遺構・遺物が出土しました。

土器の主体は、縄文時代後期前葉の南三十稻場式と呼ばれる在地的な特徴を示すもので、中期および後期中葉の土器は少量です。石器は、磨製石斧や磨製石斧を作る道具であるハンマーや砥石、木の実をすりつぶす際に使った磨石や石皿、刃物として使用した石匙や作りかけの石鏃が出土しました。

遺構のなかで注目されるのは石囲炉です。中央に石をならべた直径80cmほどの炉があり、その中には土器の底の部分が埋設されていました。炉の中の土は赤く、よく焼けていました。炉を中心に1～1.6mの範囲から柱穴と思われるピットが4基見つかっています。今回の調査で見つかった住居は1軒のみですが、調査区の北東部に位置していることから、集落の中心部は調査区よりも北部(工事範囲外)に位置していると考えられます。

整理作業では、多く出土している在地の南三十稻場式に、他地域の土器がどれくらい、どのような様子で混入しているのかについて検討し、当時の人々の交流の様子を解明したいと考えています。(小川真一)



土器埋設石囲炉

北新田遺跡

(上越市大字荒町字北新田313番地1ほか)

北新田遺跡は青田川右岸の自然堤防上に立地し、標高17.5～18mを測ります。遺跡の周囲には旧青田川と考えられる比高差3.0m程の一段低い落ち込みが見られます。北陸新幹線の建設に伴い、7～11月にかけて6,350㎡を対象とした発掘調査を行いました。調査により、古墳時代～中世の遺跡であることがわかりました。

現在の耕作土の直下(約20cm)から、竪穴住居20棟、掘立柱建物31棟、井戸15基を検出したほか、平安時代の土器が出土した土坑、畑作溝などが見つかっています。遺構の年代については出土遺物などから、竪穴住居は古墳時代、掘立柱建物は古代、井戸は古代及び中世のものが大部分と考えられます。

調査区西側にはほぼ南北方向を走る流路を検出しました。幅約30mを測り、深さは約2mで、埋土の黒色土から古墳時代及び古代の土器が多数出土しています。この流路も旧青田川の一部と推定されます。

(株)ノガミ 金内 元)



古墳時代の竪穴住居



流路の掘削作業

埋文インフォメーション

現地説明会・発掘報告会・出土品展へのご参加ありがとうございました!

現地説明会

平成19年度も発掘調査の成果をご覧いただくために、現地説明会を開催してきました。6月15日の新潟市西郷遺跡^{にしじょう}を皮切りに、19遺跡で計23回行い、2,300人以上の方々からご参加いただきました。発掘調査に対する皆様の関心の高さを改めて感じ、今後も調査成果を県内外の皆様にお伝えできるよう、現地説明会を開催いたします。



現地説明会(村上市東興野遺跡)

第14回遺跡発掘調査報告会・出土品展

去る8月26日に糸魚川市青海総合文化会館(青海きらら)において第14回遺跡発掘調査報告会を開催いたしました。当日は、調査担当者による発掘調査報告と糸魚川市の発掘調査についての講演を行いました。

また、11月10日～12月9日には「出土品が語るにいがたの歴史」と題し、十日町市博物館において出土品の展示や解説を行いました。各会場において大勢のご来場、ご聴講ありがとうございました。

センター見学、体験学習、発掘現場訪問のお礼

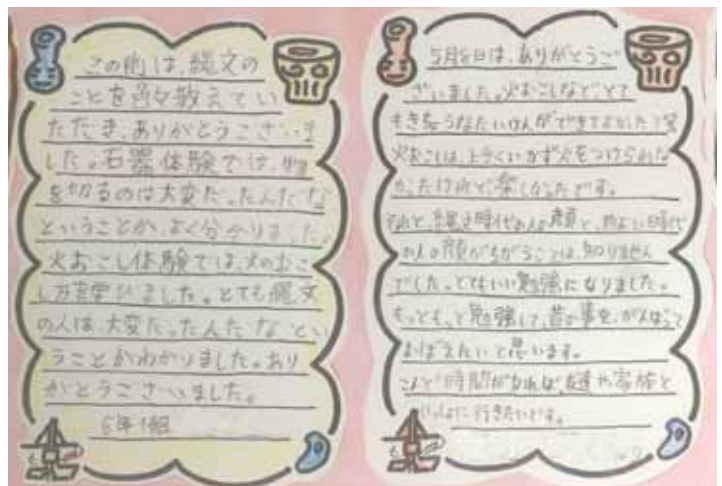
今年度4月～11月末までに3,000人を超える小・中・高校生が、社会科や総合的な学習の一環として当センターを訪れ、館内の展示品を見学し、遺跡発掘の現状や遺物整理の様子を学習しました。その中の多くの学校が体験学習(火おこし体験・土器による煮炊き体験・勾玉作り体験・土器文様付け体験など)に取り組みました。

また、今年度は糸魚川市、神林村、村上市の小・中学校の児童生徒が発掘現場(山岸遺跡・八太郎遺跡・西部遺跡・長割遺跡)を訪れ、現地の様子を見たり、発掘体験をしながら学習しました。

毎年、春と秋に体験を希望する学校が集中します。そこで、訪問を希望されても、すでに予定が入っていてお断りすることもありました。当センターでは、出土遺物や体験道具などを持って学校を訪問する「出前授業」も行っていますので、センターまで来られない場合などは、ぜひご検討ください。



出前授業の様子(新潟市立真砂小学校)

たくさんのお礼状ありがとうございました!
(新潟市立小須戸小学校の6年生から)

県内の遺跡・遺物59

安田城跡(昭和48年県「史跡」指定)

(遺跡所在地：阿賀野市保田)

阿賀野市とその周辺、新潟市(旧豊栄市)の一部は、中世には白河荘と呼ばれました。白河荘は上記の範囲を含む広大な荘園で、鎌倉時代の史書「吾妻鏡」には代々摂関家(近衛家・九条家)の領地と記してあります。鎌倉幕府が創設されると、関東の御家人伊豆の大見氏が地頭職としてこの地に土着しました。その後、子孫が分派して安田氏、水原氏、山浦氏を名乗り、南北朝の時代から戦国時代にかけて、白河荘はこれらの人々によって統治され、安田城は中世、安田氏の居城でした。中世末の天正2年(1574)の「安田氏給分帳」によると、家臣は109名で、彼らは与えられた土地で生活しており、近世の城下町のように領主の城下に集中してはいなかったようです。

安田氏は安田城を根拠地に自立性の強い勢力として「揚北衆」(鎌倉～戦国期に越後北部に割拠した国人豪族。揚北とは阿賀野川北岸地域を指し、阿賀北衆ともいう。)と呼ばれていましたが、上杉謙信の越後統一後は、謙信に仕え、数々の戦功をたてたといわれています。戦国期に活躍した安田治部少輔は上杉氏対武田氏による川中島の合戦において武勲があったとされ、上杉謙信から感状(通称「血染めの感状」といわれる)を受けています。慶長3年(1598)、上杉景勝の会津移封により安田氏も同行したため、代わって安田城は村上城主村上義明の支城となり、その家臣吉武右近が入城しました。その後、村上氏に代わって村上城に入った堀直奇の時代、元和4年(1622)に安田城は廃されます。寛永16年(1639)直奇の次男直時が3万石を与えられ安田藩が成立しました。直時の子直吉は正保元年(1644)居所を村松(五泉市)に移しました。

現在残る城の遺構は堀氏時代のもので、本丸の全域と南側に続く二の丸の一部が判別できます。本丸は90m×70mの長方形で、周りに幅15～20mの堀があります。本丸周辺の土塁の多くは失われ、本丸の南側に続いてカギの手に二の丸の土塁と堀の一部がわずかに残っています。



安田城付近図(明治年代更正図より)



安田城跡(北から) 写真提供:阿賀野市教育委員会

埋文にいがたNo 61

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津
93番地1
TEL (0250) 25 - 3981
FAX (0250) 25 - 3986
e-mail : niigata@maibun.net
URL : http://www.maibun.net

印刷 阿部印刷株式会社